



玉川裕子先生（桐朋学園大学教授）講演会

「音楽の国ドイツ」をジェンダー視点から考える

2022年10月6日（木）14:40~16:10 （Zoomによるオンライン開催）

参加ご希望の方は、9月30日までに学習院大学ドイツ文学会宛(de-ges(at)gakushuin.ac.jp)に連絡下さい。10月4日までにZoom情報を差し上げます。アドレス中の(at)を@に置き換えてください。

<講演趣旨>

現在日本で定着しているドイツイメージのひとつに「音楽の国」をあげることができるだろう。バッハ、ベートーヴェン、ヴァーグナー、ブラームス等、今日に残る「傑作」を残した「偉大なる大作曲家」を生み出した国、というわけである。

近年、私たちに馴染みの音楽史が、もっぱら「男性の大作曲家」の人と作品を語ることによって成立している音楽史の記述そのものを問うような研究が進んでいる。本講演では、ポピュラーな音楽史が成立した過程について概観したうえで、このような価値観が成立するにあたって女性が果たした役割と、そこから生じるジレンマについて考えてみたい。



玉川裕子先生 ご紹介

桐朋学園大学（ピアノ専攻）を経て、東京大学大学院総合文化研究科比較文学比較文化修士課程修了。
2006年—2007年：オルデンブルク大学非常勤講師（近代日本の音楽文化史担当）、桐朋女子高等学校音楽科教諭を経て、2015年より桐朋学園大学教授。



ご専門領域：近代ドイツおよび日本の音楽文化史、ジェンダー視点による音楽史



著書（共著）および論文（単著）

- ・『女性作曲家列伝』（小林緑編著、平凡社、1999年）、執筆担当「クララ・ヴィーク＝シューマン」
- ・『ドイツ文化史への招待——芸術と社会のあいだ』（三谷研爾編、大阪大学出版会、2007年）、執筆担当「ピアノのある部屋——市民的教養としての音楽」
- ・「ドイツ市民社会における音楽文化のジェンダー化」、日本ドイツ学会編『ドイツ研究』第42号、2008年。
- ・「女子学習院における音楽——皇后／皇太后の象徴としての音楽」、『桐朋学園大学研究紀要』第44集、2018年。

（編著）『クラシック音楽と女性たち』、青弓社、2015年。

【主催】学習院大学ドイツ文学会、【共催】学習院大学文学部文学会

